

聖書:列王記第二章8～17節

説教:神の人のところへ行くその1

はじめに

先週の週報では、4章28節まで取りあげる予定としておりましたが、少し変更して、こここのところを二つに分け、今日は17節までを見ていくことにします。

前回、エリシャの仲間であった一人の預言者が亡くなったとき、そのやもめが来て、二人の息子が借金のカタに取られて売られていく、どうしたらよいだろうかと訴えてきた場面を見ました。そのとき、レビ記25章39節を取り上げ、どんな事情があっても、聖書では子どもが売られていくことを禁止していないし借金の棒引きも認めていない、そのように言いました。そのことで少しわかりにくい部分があったので、二つのことを補足させていただきます。

まず一つ目。レビ記にはこう書かれていました。

「もし、あなたのもとにいるあなたの兄弟が落ちぶれて、あなたに身売りしても、彼を奴隷として仕えさせてはならない。」

ここだけ読めば、「奴隷として仕えさせてはならない」とあるので、たとえ借金を返せなくても、奴隷として売られることはない。そんなふうには捉えられるかもしれませんが。実はそうではなくて、前後を読むとわかるのですが、やっぱり身売りはされるのです。ただ、外国人の場合は奴隷のように扱われても文句は言えないけれど、同胞のイスラエル人については、厳しい扱いをしてはいけない、雇い人のように丁寧に扱いなさい。それが「奴隷として仕えさせてはならない」の趣旨になります。

それから二つ目。前回は、借金の棒引きは認められないと言いつたのですが、これは少し不正確になります。五十年ごとにヨベルの年というのが巡ってきて、そのヨベルの年になると無条件で借金はゼロになる。棒引きになるという制度がありました。ただし、そうなるのは五十年に一回だけです。実質的には、やはり借金は払わなければなりません。それで、エリシャはたくさんの壺に油を満たすという奇跡を起こすことで、途方に暮れていた家族を救っていく。そのような方法をとることになったわけです。

今日はその続きを見ていきます。ここにはシュネムの女と呼ばれる裕福な女性が登場します。この女

性の身にどのようなことが起きていったのか。そこにどのような神のご計画があったのかを見ていきます。

1 シュネムの女

1) 裕福であった

まず1節をお読みします。

「ある日、エリシャがシュネムを通りかかると、そこに一人の裕福な女がいて、彼を食事に引き止めた。それ以来、エリシャはそこを通りかかるたびに、そこに寄って食事をするようになった。」

シュネムという町は、預言者エリシャが住んでいたサマリアから歩いておよそ半日ほどの距離のところであったと言われていました。そのころエリシャは、サマリア地方の町や村を巡りながら神のみことばを語り、霊的な指導をしていて、シュネムにも定期的に寄ることになっていたのでしょうか。そんなある日、シュネムに住むひとりの女性がエリシャを見かけ、食事に招くことにします。それがきっかけとなって、エリシャはシュネムの町に来るたびに、この女性の家に寄るようになっていきます。

2) 「神の聖なる方に違いありません」

ところで、シュネムの女性は どうしてエリシャを食事に招こうとしたのでしょうか。よほどのことがないと普通はそういうことはしません。8節でこう語っているのがヒントになりそうです。

「いつも私たちのところに立ち寄って行かれるあの方は、きっと神の聖なる方に違いありません。」

シュネムの女性は、初めてエリシャを見かけたとき、この人は普通の人ではない、なにか特別な人ではないかと感じ、そのまま見過ごすことができなかつたようです。しかし何が特別なのかまでは、そのときはわかりませんでした。けれども、何度も食事をして話を聞いているうちに、エリシャは、きっと神の聖なる方に違いないとの確信に導かれていきます。

3) アブラハムの場合

これと似たような話どこかで聞いたことがある、そう思った方がおられるかも知れません。創世記18章で、アブラハムも同じような体験をして

いました。アブラハムが天幕の前に座っていたとき、向こうから三人の人が歩いてきます。これを見たアブラハムは、わざわざ駆け寄って、自分の家で食事をして休んでいってくださいとお願いをします。こうして食事が終わると、アブラハムはこの三人と一緒にソドムの町に向かって歩いて行くのですが、そのうちに彼らが神の使いであることに気がつきます。そればかりでなく、そこでアブラハムは主である方と出会い、ソドムに住む人々が一人でも多く救われるようにと、神さまの前でへりくだりながら神さまと駆け引きをしていくのです。詳しくは創世記18章を読んでいただければと思いますが、とにかくそういうことがありました。

シュネムの女性とアブラハムを比べると、神の人、あるいは神の使いを食事に招いたという点が似ています。そればかりではありません。後で触れますが、子どもがなかったのに、子どもが与えられていく、そこもよく似ています。シュネムの女性は、第二のアブラハムと言ってもいいほどではないか。そんな気さえしてきます。

4) 神にささげることは

この女性が「あの人は神の聖なる方」とであると確信したとき、あることを思いつきます。エリシャが来たときにはいつでも自由に泊まってもらい休むことができるようにしよう。それで屋上にわざわざ小部屋まで作らせ、なかにはきちんとベッドや椅子まであつらえさせるのです。

もしシュネムの女性が、どんなに優しくて親切な性格だったとしても、神を恐れる人でなかったならここまではしなかったでしょう。神を恐れる信仰者であったからこそ、神にささげたいとの願いがわき起こり、精一杯自分のできることをして、エリシャを迎えたいと願っていくのです。

さて、ここでささげるということについて少し確認しておきたいと思います。いま旧統一教会の事が大きく報じられていることは皆さんもご存じだと思います。言うまでもありませんが、私たちとはまったく異なる立場に立つ団体です。しかし、世の人たちはそうは見えてはくれません。統一教会であろうが私たちのような一般のキリスト教会であろうが、宗教という同じ枠でくくって見られてしまい、また特に献金のことになると、敏感に反応します。教会に来ませんかと誘おうとすると、「教会に行ったら献金しなければならないのでしょうか？」そんなふうにお金を払わなければならないという感覚で質問されることがあります。また、こんなふう旧統一教会のことで騒がれると、な

かには「教会に行ったらお金を巻き上げられる。」そんなふう思い込む方も出てきます。

では、いったい献金とはなにかと問われたら、どう答えたらよいのでしょうか。そのことを考えるときに、ちょうどこのシュネムの女性がすばらしい見本となってくれます。彼女はなぜここまでしたのでしょいか。たとえばエリシャにこんなふう言われたのでしょうか。「あなたは裕福でしょう。それなのにどうしてもっと神にささげないのですか。あなたはもつともつと献げるべきです。献げれば献げるほど、あなたとあなたの家族は神さまから祝福をいただくことができます。」あるいはこんなふう言われたのでしょうか。「あなたは沢山持っているのに、もしも出し惜しみして神にささげようとしなければ、あなただけでなく、あなたの家族は救われません。かならず地獄に落ちます。」そんなふう脅かされたからでしょうか。

聖書をよく読んでください。エリシャは自分からこの女性の家を訪ねて、「食事をさせてください」と言いましたか。エリシャは自分のほうから、屋上に部屋を作ってほしいと要求しましたか。いいえ。エリシャはなにも要求していません。すべてはこの女性のほうからしたことです。神を信じる信仰のゆえに、心の中に湧いてきた神にささげたいという願いを行動に移していただけです。

なぜ神にささげたいと願うのでしょうか。献げなければ地獄に落ちるといふ恐怖感からでしょうか。あるいは、神に献げたらもっと良いことが起こるに違いないというような御利益を求めようとしたのでしょうか。ちがいます。神が自分の人生に関わってくださり、ともに歩いてくださる。神とのそのような深い交わりを経験しているからではないですか。神との交わりに確かな手ごたえを感じる時、喜びが増し加わります。そうしたら、心のうちに神にささげたいという感謝の願いも自然にあふれてきます。それが神にささげることの本来の意味になります。決して強制されたり、脅かされたりしてするものではありません。

2 エリシャ

1) 一生懸命骨を折ってくれた

エリシャもシュネムの女性のそのような信仰がすぐにわかりました。それでこのようなことを言います。13節を読みます。

「エリシャはゲハジに言った。『彼女にこう伝えなさい。「本当に、あなたはこのように、私たちの

ことで一生懸命骨折ってくれたが、あなたのために何をしたらよいか。王か軍の長に、何か話してほしいことでもあるか」と。』彼女はそれにこう答えた。『私は私の民の間で、幸せに暮らしております。』」

「私たちのことで一生懸命骨折ってくれた」と言っております。エリシャにとっても、このシュネムの女性がしてくれたことは、かなり飛び抜けていたようです。それでエリシャは何かお礼をしたいと申し出るわけです。エリシャは当時、政治家や軍人とも付き合いがあったようで、もし困っていることがあれば、自分が口利きしてもいいよ、そういうことを提案します。

普通こう言うことを言われたら皆さんはどう思いますか。「しめた。この際、あのことこのことを頼んでもらおう」と言って、一枚の紙には書ききれないくらいのお願いをするかもしれません。

ところがシュネムの女性は、「自分はいま幸せに暮らしているので、なにもしていただくことはありません」と言って、やんわりと辞退します。さきほど、この女性がどうしてここまで献げたのかお話ししましたが、これでおわかりでしょう。エリシャに何かを期待して献げたわけではありません。いやな言い方ですが、「下心があつて」したのではないことが、これで明らかになりました。

2) あなたは男の子を抱くようになる

ここでエリシャが、「ああ、何もいらぬんだ」と言って終わってくれたなら、この女性はこのあと平穏な人生を過ごすことができたかもしれません。ところがエリシャが次のように語ったことによつて、この女性はまったく思いもかけなかった人生に歩み出していくことになるのです。16節前半を読みます。

「エリシャは言った。『来年の今ごろ、あなたは男の子を抱くようになる。』」

信仰深いシュネムの女性ではありましたが、さすがにこれを聞いて、「まさか」と思いました。14節に「彼女の夫も年をとっています」とあるように、もうとっくの昔に子どものことは諦めていました。それでこんな返事をします。16節後半です。

「すると彼女は言った。『いいえ、ご主人様。神の人よ、このはしために偽りを言わないでください。』」

エリシャがシュネムの女性の家で食事をするようになったあたりの様子は、アブラハムによく似ていると先ほど言いました。似ているのはそれだ

けではありません。アブラハムの妻サラは、神の使いから「来年の今ごろ、男の子が生まれる」と言われていました。食事のこともそうですが、諦めていた子どもが与えられるというストーリーは、そっくり同じです。

サラは子どものことを聞かされたとき、信じられなくて笑ったと書かれています。サラという名前が、「笑う」ということばに由来しているくらいです。シュネムの女性もそうでした。信じられませんが、冗談を言ってからかわないでくださいと取り合おうとしません。しかし一年経ったとき、エリシャが告げたとおりに、男の子を産みます。

聖書の時代、子どもが産まれないということは、神の祝福からこぼれ落ちてしまったかのような、大変な苦しみでした。それはただ子どもが欲しいというような単純なことではなく、もし男の子が与えられなければ、江戸時代と同じで、お家断絶、一家離散、一族郎党が路頭に迷うくらいの大変なことになるのです。アブラハムとサラの夫婦はそれで苦しんでいました。

シュネムの女性も、同じようにずっと子どもが与えられないことで苦しんでいました。もちろん神に祈ったでしょう。けれども何年待っても与えられずとうとう夫は高齢になり、もうすっかり諦めていました。それが今思いがけなく、子どもが与えられるのだと聞かされ、このときは戸惑いましたが、数ヶ月経つと妊娠したのがわかり、エリシャのことばが真実であったことを知らされていくのです。

3 神

1) なぜ

今日の箇所からどんな教訓をひきだすことができるでしょうか。ある方はこう言うかもしれません。「神に一生懸命献げた人は、このようにたくさん祝福をいただくことができる。だから皆さんもこのシュネムの女性のように一生懸命献げましょう。」

これは正しい教訓でしょうか。もしそうであるなら、どこかのカルト宗教が言っていることとほとんど違いはありません。それでは、私たちは実は危険なカルト宗教の信者だったのでしょうか。いますぐ脱会しなければならぬかわいそうな人たちなのでしょうか。私の口から言っても説得力はありませんが、そんなはずは絶対にありません。では、聖書は何を言おうとしているのでしょうか。

実はこの後、どんなことが起きていくのか。それを見てからでないと、簡単に結論を出すことはできません。

ちょっと先取りして言いますが、このあと、せっかく与えられた男の子が突然病気で死んでしまうのです。それでこの母親はエリシャのところまで走って行ってこう訴えます。28節を読みます。

「私がお主人様に子どもを求めたでしょうか。この私にそんな気休めを言わないでくださいと申し上げたではありませんか。」

母親が言いたいことはこうです。「私は、自分から子どもが欲しいと願ったことは一度もありませんでした。ところがあなたは、子どもが与えられると語ってくださいました。それは冗談だったのですか。そんなはずはないでしょう。それは真実なことばのはずでしょう。真実なことばであるのなら、どうしていま子どもは死ななければならぬのですか。親の不注意で亡くなったというのなら、自分たちの責任ですからあきらめます。でも子どもはまったく予期せぬ病気で亡くなったのです。こんなことになるのであれば、最初から子どもが与えられなかった方が、まだ幸せでした。どうしてこんなひどい目にあわなければならないのですか。」

このようにエリシャに向けて訴えます。神に向けて心から叫んでいます

皆さんはどう思われるのでしょうか。私自身も似たような経験してきました。私の一人息子が中学一年生の時のことですが、死にはしませんでした。このままなら死ぬかもしれないというところを通されました。本人もそうですが、私たち夫婦も苦しみました。ですから、シュネムの女性の身に起きたこの出来事は、どうしても他人事には思われぬのです。

2) 良いものを与えようとする

神はどうしてこのようなことをなさるのでしょう。この母親を苦しめるためにこんなことをするのでしょうか。もしそうであるなら信仰とはいったい何でしょう。さきほども言いました。この女性は神にささげることが純粋に喜んでいたので。エリシャもその純粋な信仰を見たからこそ、奇跡のようにして子どもが与えられることを告げたわけですよ。それなのに、どうして苦しみにあわなければならないのでしょうか。

いったい信仰とは何でしょうか。信じることによって、私たちは神からどんなものを与えられるのでしょうか。途中で壊れていくようなものでしょ

うか。あるいは途中で失われてしまうような、はかないものでしょうか。

3) 神にとって良いもの

決してそんなことはありません。神のひとり子が十字架でいのちを捨ててくださり、それを信じる者には永遠のいのちを与えてくださる。そのような約束を与えてくださったのは神さまです。この望みは決して取り去られることはないとも書かれています。

では、神が与えてくださるものはそれだけなのではないでしょうか。いいえ、まだあります。神さまは、ご自分のことをもっと知って欲しいと願っています。どんなことを知って欲しいのでしょうか。救いのことに関してです。神さまが、私たち罪からを救うためにたどるような苦しみを通して行かれるのか。そのことを、ただことばだけではなく、ある選ばれた人たちを通して示そうとされるのです。どういうことでしょうか。

アブラハムを見てください。せっかく与えられたひとり子イサクを、あるとき「全焼のいけにえとしてささげなさい」と言われました。アブラハムにとって最大の苦しみだったはずですが、でもそこを通されていきました。

シュネムの女性もそうです。せっかく与えられた子どもが取り去られていくという、母親としてこれ以上のない苦しみを通されていきます。しかしその苦しみを通ったとき、初めてアブラハムは知ります。シュネムの女性も知っていく。父なる神さまがご自分のひとり子を、罪ある者としてさばくことがどれほどにつらいことであったのか。それでも、父なる神は私たちを救うためにこの世にひとり子を遣わすことは、やめませんでした。苦しみを通されなければ、神さまがどれほど深く私たちを愛して下さっていたのかわからない。そういうことがあるのです。

詩篇119篇71節をみるとお通りです。

「苦しみにあつたことは私にとって幸せでした。それにより 私はあなたのおきてを学びました。」

私たちを幸せにしたい。神はそうのように願っています。しかしその幸せは私たちが願うものとは少し違っているので、そこで戸惑いを覚えるかも知れません。しかし最後に私たちが告白していきます。「苦しみにあつたことは 私にとって幸せでした。」

このように導いてくださる神を信じ、また歩んでまいります。